

# 現代のカウンセリングとエミールの教育論との比較

——遊戯療法を中心にして——

並河信子

## ★ 問題

近年、相談室（所）などで心因性の多様な問題をもつた成人に対してはカウンセリングによって、児童に関しては主として遊戯療法によって、その問題を解決することが実施されており、事例・治療者によって程度の差はあるが効果はあがっているといえよう。事例の問題解決に参加している治療者は（カウンセラー或いはセラピストなどと呼称される）治療経過・効果・技術の検討など多くの問題に直面している（その詳細については諸氏により本誌七月号、幼児教育と心理療法の特集号にのべられている）。私も児童相談室の一員として、主として幼児を対象に遊戯治療に当っているが、治療経験からすると治療者の治療に関する思想というか、治療哲学が、さらに治療者自身の心身の健康の問題が、人間が人間を相手にする問

題だけに重要な要因となってくることが痛感される。

関係療法を実施しているアレンは、その著書「問題児の心理療法」<sup>(1)</sup>の終章“治療哲学”の中で、プラトンが二三〇〇年以前にいた「共和国」の中にのべられている、くさりにつながれて地下の洞穴の中にいる人たちを太陽の光の中につれていくまでの対話を例にあげ、これは人間の成長が意味深くかれているとし、現代の心理療法と比較しながら、治療者は光の側に立つべきである、事例をくらやみからすぐ光の中につれていくてはならないなど検討を加えつつ、自己の治療哲学をうちたてんとしているが、ここに技術にのみ走らないアレンの真執さがあると思う。

たんに遊戯療法といつても来談者中心療法（あるいは非指示的カウンセリング）・精神分析・関係療法などいくつかの学派が考えられるが、今回は来談者中心療法とエミールを比較した。前者のテキ

ストにはアーカスラインの著書<sup>(2)</sup>「遊戯療法」の八原理を中心とし、その思想のよりどころであるロジャーズの二、三の著および彼の自伝ともいふべき「私を語る」<sup>(3)</sup> This is me を加えた。エミールは五才までの教育論である第一篇、十二才までの教育論である第二篇を用いた。たんに心理療法といつても幼児および児童は（事例により差異はあるが）カウンセリングよりは遊戯療法が適用されるが、ちょうどエミールの第一篇・第二篇<sup>(4)</sup>はその年令に該当する教育論と思われる所以で、五篇までのうちこれらの篇のみを選んだのである。

しかし今回は幼児教育論である第一篇を中心にして、次にルソーの著「エミール」との比較を試みた理由をのべる。

(a) 治療原理・方法が活用され治療が完全に行なわれたときそこにみられる人間像と、教育論で求める理想像とは合致するのではないかという仮設をもつた。

(b) 今日の教育思想には大体四つの流れ<sup>(5)</sup>、すなわち進歩主義・本質主義・永遠主義・社会改造主義が考えられるが、ロジャーズの思想は進歩主義的思想の基盤の上に多くのものが加味されている（例えば実存哲学・神的思考など）と思うが、進歩主義の思想に積極的な影響をあたえたエミールとの比較は、ロジャーズが直接的な影響を受けなかつたとして<sup>(6)</sup>も米談者中心療法を理解するために意義があると思う。

(c) ウィリアムソンは非指示派の人々とルソーの思想の類似を認め、さらに両者とも外的要素を無視しがちであると批判を加えて

いる<sup>(7)</sup>が、エミールとの比較は、米談者中心療法を検討するためにも必要と思う。

(d) 米談者中心療法とエミールとの比較研究は多少あるとしても、私は両思想の求めんとしたものの比較に興味をおぼえ探つてみたいと思った。とくに現代の遊戯療法の原理とエミールの幼少期の教育論との比較に関心をもつた。

(e) 「エミール」に多くの影響をあたえたジョン・ロソクの教育論との比較、さらにフレーヘル・ベスター・チーらの教育論と現代の治療論との比較も試みんとしているが、まず現代の教育に直接間接に影響の多いエミールとの比較を試み今後の比較の参考に供したい。

以上いくつかあけてみたが、結局は現在実践している自己の遊戯療法のよりどころに供するために、この比較を試みたのである。すなわち昨年の夏来日したロジャーズから京都大学と茨城キリスト教学校で講義を受けたが、再々彼の思想のよりどころを受講者たちが問うたが確答はなく、却つて各治療者が自分の治療思想を自我の中にうちたてるべきだということを学んだのである。エミールとの比較は私の治療哲学の確立に役立つのではないかと思い、私自身の遊戯療法のよりどころになにに供するところがあれはど、米談者中心療法の遊戯療法の原理と「エミール」との比較をこころみんとしたのである。

## ★ 手 続き

ルソーのエミールを、また現代の米談者中心療法を、それぞれ理解することさえ困難であるのに、さらにそれらを比較することは容易なことではないが、今回は現在の私にとってできる範囲で試みることにした。

アックスラインは遊戲療法の基本原理として八項目をあげ、おのれに詳しい意見を述べ事例をあげていて、項目のみをあげると次の如きものである。

- (一) ラボートの確立（治療者はできるだけ早くよいラボートができるよう、子どもとのあたたかい親密な関係を発展させねばなりません。）
- (二) 子どもを完全に受け入れること（治療者は子どもがあるがままに受け入れます。）
- (三) おおらかな気持をつくりあげること（治療者は子どもが自分の気持を完全に表現できるような自由感を味えるように、その関係におおらかな気持をつくりだします。）
- (四) 感情の認知と反射（治療者は子どもの表現している気持を油断なく認知し、子どもが自分の行動の洞察が得られるようなやり方で子どもの気持を反射してやります。）
- (五) 尊敬心を持ちつづけること（治療者は、子どもにそのようにする機会があたえられれば、自分で自分の問題を解決しうるその能力に深い尊敬の念をもっています。選択して、変化させる責任も子ども

の責任です。）

(vi) 子どもが先導します（治療者はいかなる方法でも子どもの行ないやべ話を指導しようとしません、子どもが先導するのです。治療者はそれに従います。）

(vii) 治療はせかないこと（治療者は治療をはやめようとしません。治療は緩慢な過程であって、治療者はその緩慢な過程であることを認識しています。）

(viii) 制限の意義（治療者は治療が現実の世界に根をおろし、子どもにその関係における自分の責任を負はせるのに必要なだけの制限を設けます。）

以上は米談者中心の遊戲療法原理であるが、これに対して「エミール」は教育論である。背景となる時代、社会も異なるし、さらに思想の系譜の比較および実際上の方法の細い点などについてはその比較に相当の限界があると思われる。しかしそれらは今後に託するとしてまずエミールを再読し、アックスライン、ロジャーズらの思想に何らかの意味で関係があるものをひきだし、(a) 共通点を感じる意見、(b) 問題や抵抗を感じる意見、(c) 相違すると考えられる意見等に分類してみた。しかし問題点と相違点、或いは類似点と問題点が共存するような内容もあるなど、分類が困難な思想もいくつかみられた。

## ★ 比 較

## アックスライン遊戯療法原理とエミール第一篇との比較

第1表		エミールに見られる類似意見	問題意見	相違意見
I	ラボートの確立			
II	子どもをあるがままに受け入れる	力を全部つかわせる（自然が子どもに与えた力は全部これを子どもに使わせねばならない）P70		病身な子どもは預らぬ（私は病身な子ども、虚弱な子どもは仮令80までその子どもが生きのびるとしても預りたくない）P51
III	おおらかな関係をもつ	自由を多く権力を少なく（右に列挙した格律の精神は、子どもにより多く眞の自由をあたえ、権力をより少なくしか与えないことにある）P81		
IV	感情の認知と反射	子どもをよく研究する（注意深く子どもの言語や動作を研究せねばならない）P81		
V	子どもを尊敬する	境遇と習性（同一の境遇に止っている間は、人々は習性から生じた甚だ不自然な傾向を保存していることができるが、境遇が変化するや否や、この習性は止んで自然性が復活してくれる）P20		
VI	子どもが先導する	自然の発見（彼は生徒に何も与えてはならない）P48（彼らにとっては彼ら自身がすることの他は一切万事まずくゆくのだ）P57自分で実行する（眞の教育は他から教えることよりも自ら実行させることにある）P27	指導者について（立派に教育される為には子どもはただ1人の指導者のみに導かれねばならぬ）P50	
VII	治療をせかない	功を急がぬ（子どもに本来の力を回復させることは徐々にやって初めてできるのであるから功を急いではならぬ）P63～64		
VIII	制限			

I エミール第一篇と  
遊戯療法原理との比較  
比較のものに関し  
て問題も多いと思うが  
前述の手続きのもとに  
分類したもののが第一表  
である。すなわちアッ  
クスラインの各項目に  
ついて比較すると、治  
療初期にとくに必要な  
思想である(1)の原理は  
これに関係する思想は  
エミールにはみあたら  
ないようである。アッ  
クスラインの重視して  
いると考えられる(2)に  
関しては表の如く類似  
面と相違面とがみられ  
る。(3)、(4)、(5)に關し  
ては一箇所ずつ類似点  
がみられる。(6)は未談

問題意見	相違意見
要は何もしないのを避けることである。 単に風に逆って船を進めるというだけの時には船の進路を変えればよい。しかし狂瀾濤の中に踏み止まろうとするためには錨を下さねばならぬだろう。(P25～26) もしできるなら教師自身が、子どもだといいと思う。(P46)	(P71) 絶えず苦しむのが、人間の運命である。(P39)
世間の普通の人の教育の模範として役立つのは、普通の人間の教育のみである。普通の人以外の人は何をされようともそれには順着なくひとりで成長してゆく。(P48)	けれども彼は私以外の人に従ってはならない。これが私の第一のよりもむしろ唯一の条件である。私は生徒と教師は互に一心同体であって、一生の運命と共にすべきものだと考えて貰いたい。(P50)
……私は教える子どもを富者から選ぶ。そうすれば少くとも一人だけ真実の人間を増したことになるのだ。貧者は自分の力だけで立派に人となってゆくのだから(P49)	私は病身な子ども、虚弱な子どもは、仮令80までその子どもが、生きのびるとしても預りたくない。私は、いつも身体の保護にばかり没頭して、いつまでも彼自身にも他の人に役に立たぬような人を預るのは真っ平だ。(P51)
大づかみに薬は全人類に有害だというのである。(P58)	
決して乳母と議論をしてはならぬ。命令して乳母のすることをみているがいい。そして十分意を払って諸君のだした命令を実行し易くするように心掛けるがいい(P66)	
私は世人が子どもに新奇なものや、醜い厭わしい、珍奇な色々の動物などを努めて見せることをのぞむ。しかし始めは少しづつ遠くから見せ、徐々にそれに慣らして、やがて人がそれを手にとって見せ、遂には子どもが自分で手にとって見るようさせたいものである。	

中心療法の根本思想と解するが、これと量的、質的に類似する思想がエミールに多くみられるのは興味ある点と思う。(表以外にも二、三あげられる) (a)についてのべられている箇所は少ないが質的に近いと思う。(b)に関しては具体的に類似した言葉がみられるというより全体にこのような思想が流れていると思う。しかし第一篇はエミールの全篇をとおしての序論的要素も多いために第二篇に比して五才迄のことが量的に少ないため、アックススラインとの比較ができる内容が少ない。さらに身体の問題が重視されている。金銭・約束・欲望・うそについてなどブレイルームに適用される遊戯治療と比較しにくい問題が多いと思う。

## II エミール第一篇と来談者中心療法との比較

なお米談者中心療法の基本的な思想(第二表の左側)と比較することにした。類似・問題・相違を感じた意見に分類してみたものが第三表である。それから次のようなことが言えるのではないかと思う。すなわち人間性の善に期待するという考え方は似ている。さらに表現は違うが弱は悪であるという考え方が両者にみられるようになる。次に相違とも類似とも分類できないものを問題点としたが、それだけに課題も多く、貧富に対する問題、女性観、しつけ方など意見に抵抗を感じる。相違点としてはロジャーズらはあらゆる人間を受け入れようとしているが、ルソーは自分の育てたい子どもをえらび、虚弱な子どもはうけつけようとしない(しかし、これはさ

第2表 来談者中心療法について

カール・ロジャーズ

- (1) 彼は治療の中に「感情の承認」という反応を組織的に利用することを創唱した。
- (2) 彼はこれまでの心理療法家一般——その立場を問わず——の過邊にくすぶっていた神秘的な迷路を断ち切った。そしてランク派の「クライエント中心」の哲学に明確な技術を与えたのである。この哲学の技術化是不可能であると、ランクもタフトもアレンも公言していたのである。
- (3) それと同時に、彼はクライエントの「受容」という概念に、新しい、もっと明確な、さらに深い意味をあたえたのである。
- (4) セラピストは、診断や診断的配慮に関する先入観を放棄し、専門的評価をなす傾向をすて正確な予診をなそうとする努力をやめ、人を巧みに指導しようという誘惑を克服し、ただ一つの目標に努力を集中しなければならない。その目標というのは、前には意識に否定されていた危険な領域に一歩一歩ふみこむその瞬間瞬間に、クライエントが意識的に保持している態度を深く理解し、受容するということである。
- (5) セラピストがこのような機能をはなし、この新しい「受容」の概念を実行に移した結果、クライエントは指導なしに洞察に達成し、生活に対してもより幸福なりすぐれた全体的な適応をなすことができる、という証拠が、積みあげられることになったのである。

伊東博訳編 カウンセリングの基礎 (P83~84)

### エミール(1)に見られる類似意見

私にできることは私の意見に決して満足しないことだ。私の意見のみが世界中で最も優れたものだと決して自惚れないことだ。

(P12)

凡そ一切の計画には二つの注意すべき事項がある。第一はその計画が絶対的に善であるということであり、第二はその実行の容易であるということである。(P13)

彼自身以外にはもはや他人の教導を必要としなくなるまで、この想像上の生徒を教育してみよう決心した。(P45)

一切の悪は弱いことから生ずるものだ。子どもは弱くなければ悪くない。強くしてやればよくなる。(P78)

らに検討を要するとと思う)。

## ★ 考察

まだ考察途上であり多くの検討すべき課題が残っており、問題提供にすぎないとと思うが、一応上述の如き諸点があらわれた原因について課題をあげ、考察を加えてみよう。

### △一、類似点について

a、もつとも個性的なものはもつとも普遍的である。

この課題は「私を語る」の中で「もつとも報われた経験は他人と非常な共通性をもつていると感じたことである」としてつづいて課題のことばがでているので借用したが、意味深いことばだと思う。一八世紀にかけられたエミールも現代のロジャーズの思想も非常に個性的と言いかれると思う。時代も異り、育った環境、性格も相当異なるといふと思われるが、思想の形成に共通点がみられる。すなわち二者とも、かりもでのなく独自の思想を開拓していることは同じと思う。ロジャーズは若い日、神学や哲学を学んでおり、間接的な影響は受けているにしても直接には影響は受けていないようである。すなわち「私を語る」の中でルソーの思想と殆んど近い思想をのべながら（それはアックスラインの(b)の原理と共通した思想であるが）こうした思想はあまりききなれない見解であつて、東洋的見地にも近いということをよく知つておりますと述べているところ

などからである。しかし各人がそれぞれ個性をもつていかに生きる

か、人間はいかなる状態にあるべきかというテーマに対決した場合真摯である程また普遍性がみられるのではないかと思ふ、ルソーと来談者中心の思想の共通点をまずこのように解釈したいと思う。しかしこの課題であると個性的な思想はみな共通してくるようにもとられるが、まずこの問題をあげ更に考察を進めたい。

#### b、消極教育と評されがちで積極教育である

ラッセルはその著「教育と社会体制」の中でルソーの消極説について論じ、稻富氏もその著書「ルソオの教育思想」の中で消極教育と自発活動の原理について述べている。一方ロジャーズも「私を語る」の中で、『私が私の現実や他人の現実に開かれていればいるほど、物事を急いで処理しようと焦らなくなる』とのべ、『このような積極的でない考え方を一体どうしてでもつことができるでしょうか』と述べている。両者とも外的には消極的にみえがちで、さらに評せられがちでありながら、最も積極的なものというか、はげしさをもつてゐると思われる。すなわち一例をあげればアックスライン化の原理のことをロジャースも強調し、ルソーもまた各所（第二篇）で同意見を力説しているが、このあせらず本物の自発活動をまつことこそ消極的に見えて本物の積極的教育ではないかと思う。なお興味あることは、両者ともそれぞれ自分のこの意見を逆説的なものとしていることである。

### 八二、問題点について

a、遊びで治療することについて  
アックスラインのブレイセラピーの書名のことく遊ぶことによつて治療する、遊ぶこと自体が自己目的であるという考え方そのものがルソーの『十二才までは理性の睡眠である』という知的早教育撃の思想と共通していると思う。孤立したことば・読書および学習などにたよらず、もっとも自由な自己表現である遊びに期待するところが両者の思想の似たところではないかと思う。なおアックスラインの、(国)、(大)に該当する箇所がエミールにもつとも多く見られるのもそのゆえんと思う。しかしおしつけた学習をさせないということは似ているが内容的にはちがいもあり、これは教育論と治療論どちらがいからもきいていると思うが今後検討を要する問題と思う。

#### b、自然性を重視する

その個人が持つてゐる自然の力を両者が非常に重視し、期待していると思われるところが各所というよりもむしろ両者の全体に貫して流れていると思う。人間の内面的なものを重視する、自己以外の力を過大視しない、あそびそのものを自己目的とする、児童本位であるなど両者に類似している思想はこの課題に全部含めても差支えがないのではないかと思う。しかしこの類似点は問題点も含んでいると思う。すなわちこの共通点がウィリアムソンをして批判させたところ、外的要因を重視しないという弱点として批判される原因にもなっていると思われ、この課題を追求したらある程度解決される

のではないかと思う。なおロジャースは科学は治療家を作ることはできないけれども治療家を援助できるし、さらに科学を重視してゐるが、両者の科学に対する思想のちがい、時代のちがいよりも科学のちがいなどの検討をすればなにか示唆をあたえられるのではないかと思う。

### 八三、相違点について

#### a、教育実践の問題

ペスターが身をもつてした実践から教育理論をうちたてたのと異り、ルソーは人間的経験、追求はゆたかであったが、教育実践が伴わないといふことがいえよう。これに對してアックスラインやロジャースは常に実践をつけ、アックスラインの著「遊戯療法」の後半は実際経験の記録である。

#### b、知情意の問題

稻富氏が「ルソーの教育思想」において述べられる如く、ルソーは知情意の中で情の面がとくにはげしいと思う。一方アックスラインやロジャースはともに知情意の均齊がとれており、その主張することも偏りを感じないと思われる。しかしロジャースは治療の中に「感情の承認」という反応を組織的に利用することを創唱したのであり、知情意に関しては、今後追求すべき課題の一つではないかと思つてゐる。

## ★ 結論

今回の比較から両者の求めんとしたものに何か共通の流れを感じた。さらに質的・量的にはいろいろ興味ある異なりをみせながら來談者中心の思想に何らかの意味で関係あると思われる思想がエミールの各所にみられた。自分自身の遊戯療法に対する手がかりとしては、治療はあせつてはならない、子ども（事例）のもつている力を大切にするなどについて考えさせられた。さらにこのような比較をすること自体が、実際の遊戯療法をするときに重要な安定感をあたえるのではないかと思った。研究方法など難点も多く検討すべき問題が多くこされているが今後に託したいと思つていて。

後記 最近ルソーとロジャースの間にある系譜を求めたウォーカーの論文・およびそれに対するロジャースとシユナイダーの論文を伊藤博編著「カウンセリングの理論」により興味深く読みました。それによるとロジャースはルソーから直接的影響を受けていないようです。それらを今後参考にさせていただくことにし、今回は第十五回日本保育学会で発表したものを中心まとめました。  
(大阪市立大学児童学研究室)

1. アレン著 黒丸正四郎訳 問題児の心理療法 みず書店  
2. アノクスライン著 小林治夫訳 遊戯療法 岩崎書店 昭和二八年  
3. ロジャース著 村上正治訳 私を語る 茨城キリスト教学園・カウンセリング研究所 一九六一年  
4. ルソオ著 平林初之輔訳 エミール 第二篇 岩波書店 昭和二七年  
5. 鰯坂二夫著 教育原理 玉川大学出版部 昭和三年  
6. 伊東博訳編 カウンセリングの理論 誠信書房 昭和三七年  
7. 伊東博訳編 カウンセリングの基礎 誠信書房 昭和三五年